

[D年] 聖霊降臨節第20主日(2020年10月11日)**【旧約聖書日課】ダニエル書 12章1~4節**

- 1 その時、大天使長ミカエルが立つ。
彼はお前の民の子らを守護する。
その時まで、苦難が続く。
国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。
しかし、その時には救われるであろう
お前の民、あの書に記された人々は。
- 2 多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。
ある者は永遠の生命に入り
ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる。
- 3 目覚めた人々は大空の光のように輝き
多くの者の救いとなった人々は
とこしえに星と輝く。
- 4 ダニエルよ、終わりの時が来るまで、お前はこれらのことを秘め、この書を封じておきなさい。
多くの者が動揺するであろう。そして、知識は増す。」

【使徒書日課】**コリントの信徒への手紙二 5章1~10節**

1 わたしたちの地上の住みかである幕屋が減びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです。2 わたしたちは、天から与えられる住みかを上に着たいと切に願って、この地上の幕屋にあって苦しみもだえています。3 それを脱いでも、わたしたちは裸のままではおりません。4 この幕屋に住むわたしたちは重荷を負ってうめいておりますが、それは、地上の住みかを脱ぎ捨てたいからではありません。死ぬはずのものが命に飲み込まれてしまうために、天から与えられる住みかを上に着たいからです。5 わたしたちを、このようになるのにふさわしい者としてくださったのは、神です。神は、その保証として“霊”を与えてくださったのです。6 それで、わたしたちはいつも心強いのですが、体を住みかとしておるかぎり、主から離れていることも知っています。7 目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいるからです。8 わたしたちは、心強い。そして、体を離れて、主のもとに住むことをむし

る望んでいます。9 だから、体を住みかとしていても、体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれる者でありたい。10 なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 11章1~16節

1 ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。2 このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である。その兄弟ラザロが病気であった。3 姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。4 イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」5 イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。6 ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された。7 それから、弟子たちに言われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」8 弟子たちは言った。「ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか。」9 イエスはお答えになった。「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまづくことはない。この世の光を見ているからだ。10 しかし、夜歩けば、つまづく。その人の内に光がないからである。」11 こうお話しになり、また、その後で言われた。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」12 弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう」と言った。13 イエスはラザロの死について話されたのだが、弟子たちは、ただ眠りについて話されたものと思ったのである。14 そこでイエスは、はっきりと言われた。「ラザロは死んだのだ。15 わたしとその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである。さあ、彼のところへ行こう。」16 すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と言った。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ダニエル書 12章1～4節

- 1 その時、大天使長ミカエルが立つ。
 あなたの民の子らの傍らに立つ者として。
 国が始まって以来、その時までなかった
 苦難の時が来る。
 しかし、その時にはあなたの民
 かの書物に記録が見いだされたすべての者は
 救われる。
- 2 地の塵となって眠る人々の中から
 多くの者が目覚める。
 ある者は永遠の命へと
 またある者はそしりと永遠のとがめへ。
- 3 悟りある者たちは大空の光のように輝き
 多くの人々を義に導いた者たちは
 星のようにとこしえに光り輝く。
 4ダニエルよ、あなたは終わりの時までこの言葉
 を秘密にし、この書物を封印せよ。多くの人々は
 探求して知識を増やす。」

コリントの信徒への手紙二 5章1～10節

- 1私たちの地上の住まいである幕屋は壊れても、
 神から与えられる建物があることを、私たちは知
 っています。人の手で造られたものではない天に
 ある永遠の住まいです。2私たちは、天から与えら
 れる住まいかを上に着たいと切に願いながら、この
 地上の幕屋にあって呻いています。3それを着たなら
 (異本→それを脱いでも)、裸でないことになり
 ます。4この幕屋に住む私たちは重荷を負って呻
 いています。それは、この幕屋を脱ぎたいからで
 はなく、死ぬべきものが命に呑み込まれてしまう
 ために、天からの住まいを上に着たいからです。
 5私たちをこのことに適う者としてくださったの
 は、神です。神は、その保証として霊を与えてく
 ださったのです。
 6それで、私たちはいつも安心してあります(別訳
 →心強いのです)。もっとも、この体を住みか
 としている間は、主から離れた身であることも知っ
 ています。7というのは、私たちは、直接見える姿
 によらず、信仰によって歩んでいるからです。8そ
 れで、私たちは安心してありますが、願わくは、こ
 の体という住みかから離れて、主のもとに住みた

いと思っています。9だから、体を住みかとしてい
 ようと、体を離れていようと、ひたすら主に喜ば
 れる者でありたい。10私たちは皆、キリストの裁き
 の座に出てすべてが明らかにされ、善であれ悪で
 あれ、めいめい体を住みかとしていたときに行っ
 た仕業に応じて、報いを受けなければならないか
 らです。

ヨハネによる福音書 11章1～16節

- 1ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、
 ベタニアの出身で、ラザロといった。2このマリア
 は主に香油を塗り、髪の毛で主の足を拭った女で
 ある。その兄弟ラザロが病気であった。3姉妹たち
 はイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの
 愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。
 4イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は
 死で終わるものではない。神の栄光のためである。
 神の子がそれによって栄光を受けるのである。」
 5イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛してお
 られた。6ラザロが病気だと聞いてから、なお二日
 間同じ所に滞在された。7それから、弟子たちに言
 われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」8弟子た
 ちは言った。「先生、ユダヤ人たちがついこの間
 もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこ
 へ行かれるのですか。」9イエスはお答えになった。
 「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩
 けば、つまづくことはない。この世の光を見てい
 るからだ。10しかし、夜歩けば、つまづく。その人
 の内に光がないからである。」11こうお話しになり、
 また、その後で言われた。「私たちの友ラザロが
 眠っている。しかし、私は彼を起こしに行く。」
 12弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助
 かるでしょう」と言った。13イエスはラザロの死に
 ついて話されたのだが、弟子たちは、ただ眠りに
 ついて話されたものと思ったのである。14そこで
 イエスは、はっきりと言われた。「ラザロは死ん
 だのだ。15私がお場に居合せなかったのは、あ
 なたがたにとってよかった。あなたがたが信じる
 ようになるためである。さあ、彼のところへ行こ
 う。」16すると、ディディモと呼ばれるトマスが、
 仲間の弟子たちに、「私たちも行って、一緒に死
 のうではないか」と言った。

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・10月11日「聖霊降臨節第19主日」の日課主題は「永遠の住みか」。使徒書日課(Ⅱコリント5章)で示される「天にある永遠の住みか」から取られている。

・「聖書」全体を方向づける総主題は、「創世記」の族長物語(アブラハム・イサク・ヤコブ一族の物語)に示されていると考えることができるが、その場合に重要な要素となるのが、神がアブラハムに示された「約束」で、第一に「土地取得の約束」、第二に「子孫繁栄の約束」と言うことができる。「旧約」は、この二つの約束が「イスラエルの民」という歴史的な文脈の中でどのように実現され、彼らにとってどのような意味を持ったか、ということ物語っていると見える。殊に「土地取得の約束」は、「約束の地」が早くから示されながら、それを得ること、そこに留まること、またそこに辿り着くことが困難な中で、なお彼らが「神の約束」に信頼することに立ち帰ってその目的地を目指し続ける物語として描かれる「律法」(「創世記」から「申命記」まで)と、「約束の地」に入り、所有地とすることが実現したにもかかわらず、それが「神の約束」によって為されたことを忘れ、神への信頼から離れることを繰り返し、最終的にはその「約束の地」を失ってしまう物語として描かれる(「前の」預言者)(「ヨシュア記」から「列王記」まで)と、対照的な扱われ方をしている主題である。

・「旧約」正典は、このような「土地取得の約束」を巡る「イスラエルの民」の歴史物語をもって構成されるが、そこで意図されているのは、かの地の「土地取得」の再現(に向けた決意表明)であるというよりは、本質的な意味での「約束の地」が何であるのかという問いであり、さらに、その真の「約束の地」を永遠の目的地として位置づけながら現在をどのように生きるべきかという問いである。その問いは、必然的に「終末」的神学を形成することになり、紀元1世紀のユダヤ教では、すでに終末論的神学に基づく「復活」信仰が広く受け入れられていた(ただし、ファリサイ派は「復活」信仰を主張していたが、サドカイ派はそれを否定していたことが、新約では伝えられている)。主イエスと弟子たちの教会は、その終末論的神学と復活信仰を継承した上で、「終末」における神の計画が「イエス・キリスト」の与えられた現在においてすでに実現し始めたという神学を形成した。ただし、その「終末」の現在化は限定的なものとして理解され、「すでに」実現し始めたことを手がかりに、「いまだ」実現していない現実の中で、最終的に完全に実現する「目的地」を目指す「中間時」を「旅人」として生きる生き方が、キリスト者の自己理解とされた。

・これらの神学思想を「救済史観」として強調することがあるが、聖書が「創造」から始まり「終末」で完成するという、一直線単純な歴史観を共通の土台として構成されているとは必ずしも言えない。

旧約日課(ダニエル 12章より)

・「ダニエル書」は、「旧約」正典中「諸書」として扱われてきた文書。キリスト教会の「旧約聖書」では、紀元1世紀に広く用いられていた「七十人訳(ギリシア語訳)」の配列に倣って三大預言書に続く位置に置かれているが、内容的にも「預言書」とは言えず、おそらく、セレウコス朝シリアの支配時代(紀元前4世紀末～同2世紀)にユダヤ人の愛国的・護教的気運が高まる中で創作された「信仰書」である。本書は、大きく分けて前半(1~6章)が「時代物語」形式で、後半(7~12章)が「幻視を伴う啓示(=黙示)」形式で構成されており、元来別々に創作・伝承されていた複数の「ダニエル物語」が統合されて「ダニエル書」として編纂されたと考えられるが、その起源はほとんど知られていない。なお、2~7章の大部分は、当時のシリア公用語であるアラム語で伝えられているが、残りの部分は聖書ヘブライ語で伝えられるという変則的な文書になっている。

・日課箇所は、本書最終章の一部で、ダニエルとユダヤの民の守護者として「大天使長ミカエル」が立てられるときが訪れ、救済が始まることが告げられる「啓示」となっている。ここに描かれるような救済をイメージさせる言葉は、「黙示(啓示)」の表象として「新約」のパウロ文書やヨハネ黙示録などに継承されている。

・「ミカエル」は、10:13 から繰り返し登場する「大天使長」であるが、「ダニエル書」では、同様の天使として「ガブリエル」も登場する(8:16、9:21)。「ミカエル」の名は、「神に似た者はだれか」という意味のヘブライ語から成り立っており、旧約では通常の人名としても現れる(民13:13、代上5:13、6:25、など多数)。「新約」でも、天使として登場する(ユダ1:9、黙12:7)。これらの「天使/天使長」は天的存在として描写されているが、「ダニエル書」では「ペルシア王国の天使長」(10:13,20)や「ギリシアの天使長」(10:20)なども登場し、世俗政治における何らかの立場を示唆していることも考えられる。

使徒書日課(Ⅱコリ5章より)

・「コリントの信徒への手紙二」は、「手紙一」と共に、使徒パウロが自身の開拓・創設したコリントの教会に宛てて、教会内での諸問題に対する助言を与えると共に、自身に対して非難を向ける人々に向けて弁明と和解の願いを告げるために記した一連の書簡の一つ。「手紙二」には元来複数の書簡として著された文書が複数含まれている、と推測する聖書学者が多い。

・日課箇所は、キリストと結びついた信仰者が、自らを「土の器」として自覚しながら、そこに「宝」を納めていただいている存在であるとの自己理解によって、「落胆」ではなく「希望」をもって生きる者であることを告げた上で(4章)、その希望を、終末的救いのイメージとして用いられる「約束の安住の地」としての「永遠の住みか」のイメージで語り直している。「住みか」と訳され

る語には、「オイキア」と「オイケーテリオン」の二つがあり、聖書協会共同訳では「住みか」と「住まい」に訳し分けている。他に類義語として「建物」と訳されている「オイコドメー」もある。これらはいずれも「オイコス」という「家」を意味する語の派生語だが、「オイキア」には「家族」や「財産」など広い意味での「家」の意味合いがある一方、「オイケーテリオン」には「住居」「住場所」という空間的な意味合いが強い。「オイコドメー」には「建築物」「建てること」という形成過程を示す意味合いがある。一方、6 節および 9 節の「住みかとしている」と 8 節の「住む」は、「エンデーメオー」という「デーモス」(公衆。「デモ」の語源)の派生語で、社会的に「暮らしている」という意味合いの語。このように類義語をいくつも用いているのは、修辭的な単なる言い換えという側面もあるだろうが、ここで示そうとしている事柄の広がり表現しようとしていると見ることもできる。

福音書日課(ヨハネ 11 章より)

・日課箇所は、10 章末で主イエスが福音書冒頭の場面と重なる「ヨルダンの向こう側」に移動されたことに接続しており、場面設定としては、そこから移っていないと見ることができる。一方で、ヨハネ福音書の全体構成からは、10 章末の場面設定は 1 章の設定と対となって枠を構成しており、11 章から新しい枠に移行することを示唆するものとなっていた。実際、11 章～20 章は、「ラザロの死と復活」と「イエスの死と復活」という類比的出来事を枠としたまとまりを構成しており、ここから本福音書の「受難・復活物語」が始められていると見ることができる。日課箇所から始まって描かれる「ラザロの復活」は、ヨハネ福音書が配置している「七つのしるし(奇跡)」の七番目に当たる。

・ラザロがマルタとマリア姉妹の兄弟であることは、他では知られていないが、ヨハネ福音書では「香油注ぎの出来事」(12:1 以下)もこの三兄妹の家での出来事として伝えており、この三兄妹の関係が非常に重視されている。この三兄妹と主イエスとの特別な友情関係も示唆されており、他の福音書では、その特別な関係に特別な意味を読み取られることを避けられているのかもしれない。ただし、マルタとマリアが姉妹であることに起因する逸話が、ルカ福音書(10:38 以下)では伝えられており、そこからは主イエスとこの姉妹との親しい関係もうかがい知ることができる。

・物語は、ラザロの病気の知らせを聞きながら主イエスが二日間訪問を遅らせた結果、ラザロが死んでしまったということを描くことから始められている。ここでは、「病氣治癒」ではなく「死と復活」がラザロの身に起こらなくてはならない。それが、弟子たちにとって主イエスの「死と復活」をあらかじめ示唆するものとなるから、というのが筋立て上の説明だが、読者に対しては、ラザロに代表されるキリスト信者が、主イエスの「死と復活」に結び付けられて「死と復活」にあずかる者であることを示している、と言うことができる。

来週の誕生日 (10 月 11 日～17 日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-28 番「み栄えあれや」は、前週資料を参照。
- ・21-60 番「どんなにちいさいことりでも」は、1966 年版『こどもさんびか』の増補版として 1983 年に出版された『こどもさんびか 2』のために作詞作曲された讚美歌。作詞は、幼児教育とその指導者育成に携わった菅千代。作曲は、作曲家・広瀬量平。
- ・21-226 番「輝く日を仰ぐとき」(= II 161)は、スウェーデンの伝道者ボーベリが作詞した歌詞をスウェーデン民謡の曲で歌うようになったもの。19 世紀終わりごろのスウェーデン語讚美歌集で発表された後、ドイツ語、ロシア語に訳されて歌われるようになっていたものを、英国人宣教師がウクライナで聞いて英訳して紹介した。1950 年代にビリー・グラハムが伝道集会で用いるようになって有名になり、日本には中田羽後が紹介して広く歌われるようになった。
- ・21-29 番「天のみ民も」(= I 544「あまつみたみも」)は、19 世紀ジュネーブの伝道者で多くの讚美歌を作詞・作曲したマランの曲を用いた頌栄。歌詞は、作者不詳の日本人によるもの。

21-226「輝く日を仰ぐとき」

O Store Gud

English tr. by Stuart K. Hine

1. O Lord my God, When I in awesome wonder / Consider
all The works Thy Hand hath made, / I see the stars, I
hear the mighty thunder, / Thy pow'r throughout / The
universe displayed;
- Refrain:
- Then sings my soul, / My Saviour God, to Thee, / How
great Thou art! How great Thou art!
2. When through the woods / And forest glades I wander / I
hear the birds Sing sweetly in the trees; / When I look
down / From lofty mountain grandeur / And hear the
brook / And feel the gentle breeze;
- Refrain:
3. But when I think / That God, his Son not sparing, / Sent
Him to die, I scarce can take it in, / That on the cross My
burden gladly bearing / He bled and died To take away
my sin;
- Refrain:
4. When Christ shall come, / With shouts of acclamation, /
And take me home, / What joy shall fill my heart! / Then I
shall bow In humble adoration / And there proclaim, / "My
God, how great Thou art!"
- Refrain: